湊谷杯（男子） 採用「減点方式」とは

全国高校総体（インターハイ）個人戦で1997年度大会まで行われていた方式です。

全ての選手は持ち点を5点所持し、試合ごとの内容に応じて持ち点を減点し、3試合を終えた時点で、持ち点が残っていた選手が決勝トーナメント進出となります。2試合を終えた時点で5点を失った選手は、3試合目を行うことができません。2試合を減点無しで終えた選手は3試合目を免除します。

減点は、

1本勝ち（相手選手の反則負けによる勝ちを含む）：0点
優勢勝ち：－1点
引き分け：－2.5点
優勢負け：－3点
一本負け（反則負け）：－4点となります。

基本的に、試合は1回戦が1番対2番、3番対4番、5番対6番・・・・と対戦し、2回戦が2番対3番、4番対5番と、自身の上下の選手と対戦します。

3回戦は点数が残っている選手のみで上から順番に対戦します（同所属を除く）。

大学柔道では、現在以下のような規程で大会が行われています。

団体戦：勝敗の基準は「有効」以上、指導差は引き分け
個人戦：4分の規定時間を終えて、技によるスコアの差がない場合は GS に突入
GS は技によるスコアを得るか、反則負けになるまで継続する

本大会では、大学柔道の団体戦・個人戦両方の特徴を活かしたいと、第15回大会で男子においては、はじめて減点方式を導入しました。「ぜひ継続してほしい」というご意見を多くいただいたため、本大会も減点方式を継続させていただきます。

選手は1試合目、2試合目、3試合目と、自身の置かれる状況（所持点）が変わっていきます。その中で、どのような戦い方をしていくべきなのか、自ら考え、実践し、その結果を省みることができます。

例えば、団体戦で1対0の相手リードで迎えた大将戦、自チームが勝つには一本勝ちしかない状況では、技ありを先行していても一本を取るまでは攻め続けなければなりません。これは本大会では、残り1点で迎えた3回戦と同じシチュエーションです。

指導者の皆様は、本大会を通し、選手の強みを見出していただけたら幸いです。

湊谷杯は学生の成長のきっかけ、気づきの場であることを第一に考えています。

北信越学生柔道連盟の趣旨をご理解いただければ幸いです。